

### 都市河川周辺における歩行者の景観体験分析

熊本大学工学部 学生会員 ○青井 克志 熊本大学工学部 正会員 北園 芳人  
熊本大学工学部 正会員 星野 裕司 熊本大学工学部 正会員 小林 一郎

1. はじめに 河川は人為を超えた形や空間であり、数少ない自然的な存在であることが、他の都市景観と河川景観のちがいである。そこで都市河川周辺においてはそれらの特徴を生かし、都市の魅力を向上させるように心がけることが必要である。都市河川は、その細長く挟れた空間や橋梁又は周辺の構造物などにより、空間に変化を与え、街路の河川に対する取り付き方は、歩行者の視線に対応する景観を多様に変化させる。このように多様な歩行体験は、都市河川の魅力のひとつである。そこで本研究では、熊本市の白川を対象地域として、このような歩行者のシークエンス体験を領域感という観点から分析する方法を構築することを目的とする。

2. 街路と河川の関係について 街路と河川の平面的な位置関係として、「横断」「行止り」「並行」「貫入」の4種類に大別することができる。本論文では歩行者にとって、空間変化が大きいと考えられる「横断」と「行止り」について分析することとした。

3. 領域感について 都市の中で歩行者に与える空間相互の関係を説明する方法として「こことあそこ」(here and there)という概念がある。アイデンティティを感じさせるいくつかの部分に分割させると、そこには「こことあそこ」(here and there)が生じるというものである。hereとthereが(ア)のような関係があるとき、thereは移動により、hereに変わる可能性を持っている。また、(イ)のようにhereとthereの間に移動不可能なborderがあるような関係のとき、移動によりthereがhereに変わることはない。

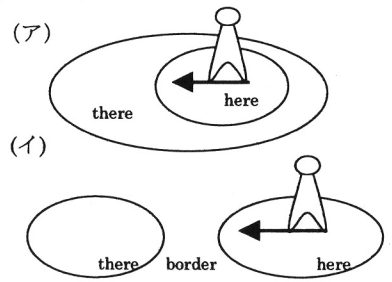


図-1 here・there・border

4. 歩行中の視覚情報の記述方法 河川と「横断」又は「行止り」の関係にある街路を河川に向かって移動し、周囲の急な空間変化がある地点やその間において写真撮影を行う。撮影方向は移動方向だけではなく、移動直角方向においても行う。歩行者が受ける周囲の空間変化は移動方向だけではなく、横方向の空間変化にも影響を受けていると考えるからである。撮影された写真からhere・there・borderの変化を表現するために、まず、次の方法で区分する。

#### 1) 平面と立面による区分

自分がいる平面(a)・自分がいる立面(b)・車通りの多い平面(c)・水面(d)・対岸の平面(e)・対岸の立面(f)・空(g)とする(図-2)。これらは要素ごとの機械的な区分法である。

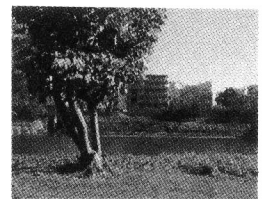


写真-1

#### 2) 領域感による区分

1)で分けた区分に対して、そのひとまとまりのシークエンス全体を考慮しながら、各要素を領域的なhere・there・border・skyとして解釈する(図-3)。解釈の対応例を図-4

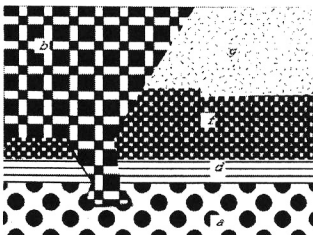


図-2 平面と立面による区分

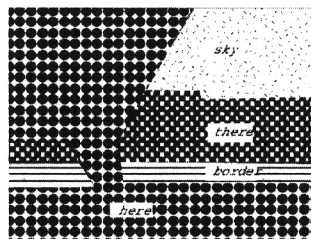


図-3 領域感による区分

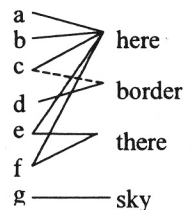


図-4 対応表

に示す。これらの関係は固定されたものではなく、  
 各々の歩行体験により変化するものである。

5. 事例(横断する場合) 白川に架かる大甲橋を  
 横断する場合において(写真-2)、1)・2)で示した  
 ように、移動方向と移動直角方向の写真を区分し、  
 面積を求め、移動による面積率の変化を100%積  
 み上げグラフで表わすと、図-5・6・7・8 のようにな  
 る。

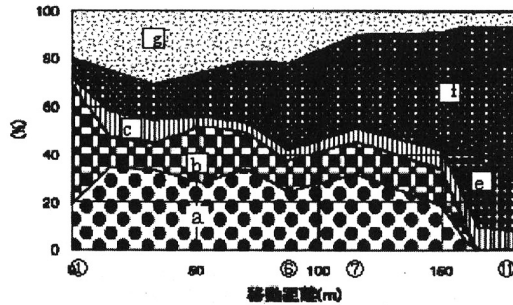
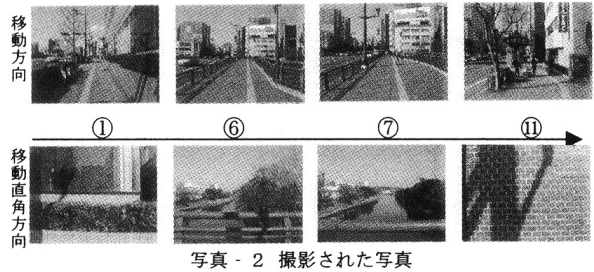


図5 移動方向の要素区分による面積変化

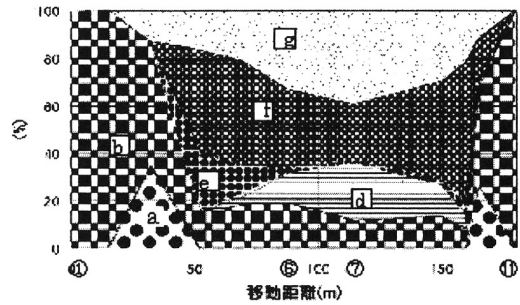


図7 移動直角方向の要素区分による面積変化

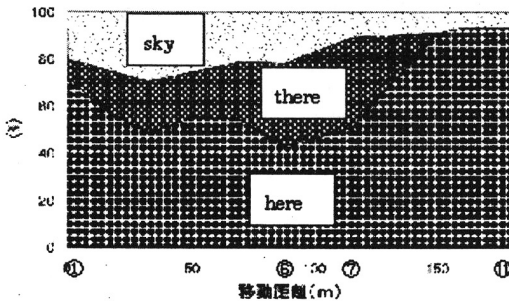


図6 移動方向の領域区分による面積変化

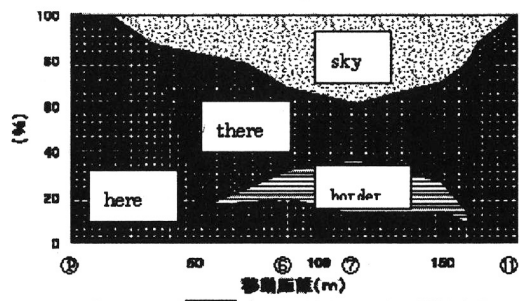


図8 移動直角方向の領域区分による面積変化

これらのグラフから読み取れる大きな特徴は、

- 1) 移動方向に関して、⑦までは対岸の立面(e)はthereである。しかし、⑦になると、対岸の平面が見えはじめ、対岸の立面と平面を含めて、hereに変わっている。(図-5・6)。
- 2) 移動直角方向に関して、border(水面)が現われる付近ではhereが急激に減少しthereが増加している。この時、thereに対応する要素は対岸の平面(e)と対岸の立面(g)であり、1)の場合においてはhereに変わると解釈されていたが、borderがあるため、1)の場合とはちがひ、hereがthereに変わらないことを示していると考えられる(図-7・8)。
- 3) 図-6と図-8のグラフはそれぞれ図-1の(ア)と(イ)における関係の特徴を示している。

よって、川を横断するときの歩行者のシークエンス体験を領域感という観点から分析すると、移動方向においては、thereをhereに遷移させる過程である。その時、移動直角方向においてはborderである川が領域感を急激に変化させていると考えられる。

6. おわりに 領域感に関するグラフを、これらの方法により記述することにより、河川周辺の歩行者の空間変化に対するシークエンス体験を分析することができた。今後、より多くの事例を積み重ねることで、より細かい考察を示せるのではないかと考える。

<参考文献> Gordon Cullen:都市の景観、鹿島出版会